きっかけは何であれ

附属図書館長
柴　田　昭　二

「読書」の対象を，小説あるいは文学作品に限定するつもりはないが，今回はそれを巡って考えることにする。

*

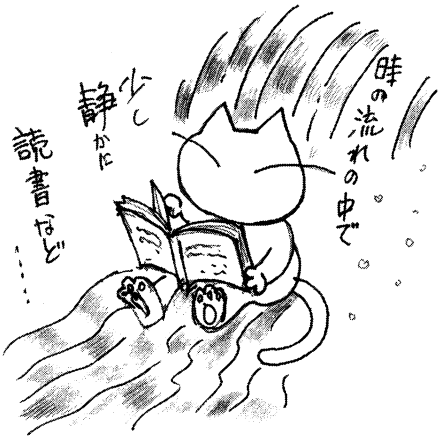
なぜ文学を読むのか。と聞かれて，このように答えたことがある。
「以前に読んだことのある作品を何年か年を隔てて読み返してみると，読み方が変わっているのに気づく。そんな時に自分自身が成長したことを感じることができる。」
これも読書の楽しみの一つだと思っている。柱にきずをつけて身長の伸びを知るような，いわゆる「定点観測」とは違うのかもしれない。がしかし，宇宙空間の闇の中で，刻々と変化する自分の位置を確認させてくれる座標にたとえられようか。

ところで，作家の藤本義一氏が本年４月25日付の朝日新聞で「自分図書館」の提案をしている。氏が作家を志した21歳の時に読んだ強烈な印象の一冊の本。そしてそれが氏の生まれた年に書かれたのだと知って，さらに感慨は深くなる。続けて氏はいう。
「こういう読書を年齢の如何にかかわらずに行えばいいと思う。自分の生まれた年の名作を展げて，熟読した時に，生きている意味がはっきりとわかる。小説でもいい，戯曲でもいい，とにかく生まれた時になにが書かれていたかを知る自分図書館の一冊を得ることだ。」
自分の生まれた年の，したがって自分と同じ長さの年数を過ごしてきた作品だからこそ，自分というかけがえのない存在を強く確認させてくれる，と私は解釈する。

そういえば，出版社の新潮社が「新潮文庫20世紀の100冊」という企画を現在行っている。1901年から2000年まで，その年の作品を１冊ずつ選んだ合計100冊に特別の文庫カバーを施したものだ。カバーには，その年の「映画」「流行語」「ブーム」などの社会状況や，その作品の時代背景などが書かれている。５月の分では，1905（明治38）年の夏目漱石「吾輩は猫である」，1915（大正４）年の徳田秋声「あらくれ」から1985（昭和60）年の村上春樹「世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド」，1995（平成７）年の佐江衆一「黄落」までの10冊。１月から毎月10冊ずつ，10月まで続けられるとのことだ。

100冊のリストを見ているだけでも面白い。なになに，私の生まれた年はロレンス「チャタレイ夫人の恋人」か。私にとって「自分図書館」の一冊は「チャタレイ」なのだろうか，とか。大学生の頃に星新一「未来いそっぷ」。そういえば星新一が新刊を出すそばから読んだものだ，とか。自分の通ってきた道と，その頃に読んだ本とが関わりをもっているように思われてくる。歴史年表の中に自分の個人史を書き込む作業に似ている。

ちなみに1981年は井上ひさし「吉里吉里人」，1982年はスティーヴン・キング「スタンド・バイ・ミー」。あなたの「自分図書館」にはどんな本が並んでいるのだろうか。

*

かつて読んだことのある本をもう一度読んでみませんか。その時とは違う自分が発見できるかもしれませんよ。